

2019 年度前期 政治学実験

講師 ソン ジェヒョン 宋 財 沄 (早稲田大学高等研究所 講師)

E-mail [jaehyun.song \[*at*\] aoni.waseda.jp](mailto:jaehyun.song@aoni.waseda.jp)

Homepage <http://www.jaysong.net>

時間 水曜日 4 限 (14:45~16:15)

教室 第 3 号館 (政治経済学部/研究科) PC 教室 (903 号室)

1 授業の目的

本講義は、実験政治学について、その手法と手続を幅広く紹介する授業である。これまでの社会科学は2つの現象間における相関 (correlation) と連関 (association) に注目してきたが、近年においては、因果関係 (causality) と予測 (prediction) を明らかにすることが目的となりつつある。実験はこの中で因果関係を明らかにする強力な手法である。

本講義では、因果推論の考え方から出発し、多様な因果推論の手法の中で、「サーベイ実験」について多様な例を用いて解説する。また、実験を行う際に注意すべき事項（研究倫理、サンプルサイズ、妥当性など）についても解説することで、より頑健かつ妥当な実験をデザイン出来るような手がかりを提供する予定である。また、講義の後半は自ら実験を設計し、プレゼンテーションとフィードバックを行う。

本講義を履修することで期待できることは以下の3点である。

1. 政治学における実験手法を習得する。
2. 実験を行う際に注意すべき事項を理解する。
3. 自らサーベイ実験のデザインと実施ができる。

2 前提知識

授業には数式を用いる場合もあるが、高度な数学知識も必要ない。ただし、 t 検定、ANOVA、線形回帰分析の知識を持っていることが望ましい。関連科目としては大学院レベルの「計量分析 I/II」、学部レベルの「計量政治学」があり、予め履修しておくことを推奨する。不安があれば講師と要相談。

ほぼ毎回の授業の前に文献を紹介する。次回の授業においては、これらの文献を予め読

んでいることを前提に行う予定であるため、必ず事前に目を通しておくこと。

3 教材

教科書 教科書は用いないものの、以下の書籍が参考となる。

- [Mutz, Diana. 2011. *Population-based Survey Experiments*, Princeton University Press.](#)

参考書 授業中、適宜紹介する

その他 本講義の内容をカバーする書籍 (左の番号が大きいほど難易度は高め)

数学

1. [永野裕之. 2015. 『統計学のための数学教室』ダイヤモンド社](#)
2. [尾山大輔・安田洋祐. 2013. 『経済学に出る数学 \(改訂版\)』日本評論社](#)
3. [Moore, Will H. and David A. Siegel. 2013. *A Mathematics Course for Political and Social Research*. Princeton University Press](#)

統計学

1. [高橋信. 2004. 『マンガでわかる統計学』オーム社](#)
2. [高橋信. 2005. 『マンガでわかる統計学 回帰分析編』オーム社](#)
3. [小野滋. 2003. 「読めば必ずわかる分散分析の基礎」\(Web 資料\)](#)
4. [小島寛之. 2006. 『完全独習・統計学入門』ダイヤモンド社](#)
5. [D. ロウントリー著. 加納悟訳. 2001. 『新・涙なしの統計学』新世社](#)
6. [鳥居泰彦. 1994. 『はじめての統計学』日本経済新聞社](#)
7. [ポール G. ホーエル. 浅井晃・村上正康 訳. 1981. 『初等統計学』培風館](#)

R

1. [浅野正彦・中村公亮. 2018. 『はじめての RStudio: エラーメッセージなんかこわくない』オーム社](#)
2. [Wickham, Hadley and Grolemund, Garrett. 2017. *R for Data Science: Import, Tidy, Transform, Visualize, and Model Data*, O'Reilly. \(邦訳あり/原著はインターネットから無料で閲覧可\)](#)
3. [Lander, Jared P. 2017. *R for Everyone: Advanced Analytics and Graphics \(2nd Edition\)*, Addison-Wesley Professional. \(邦訳あり\)](#)

計量政治学

1. [浅野正彦・矢内勇生. 2019. 『R による計量政治学』オーム社](#)
2. [飯田健. 2013. 『計量政治分析』共立出版](#)

3. Imai, Kosuke. 2017. *Quantitative Social Science: An Introduction*, Princeton Univ Press. (邦訳あり)

因果推論

1. 中室牧子・津川友介. 2017. 『原因と結果の経済学—データから真実を見抜く思考法』ダイヤモンド社
2. 伊藤公一朗. 2017. 『データ分析の力—因果関係に迫る思考法』光文社
3. Angrist, Joshua D. and Jorn-steffen Pischke. 2014. *Mastering 'Metrics: The Path from Cause to Effect*, Princeton University Press.
4. 宋財沄. 2018. 「計量政治学方法論 I」神戸大学法学研究科 (授業資料)
5. Gerber, Alan S. and Donald P. Green. 2012. *Field Experiments: Design, Analysis, and Interpretation*, W.W. Norton.
6. Imbens, Guido W. and Donald B. Rubin. 2015. *Causal Inference for Statistics, Social, and Biomedical Sciences: An Introduction*, Cambridge University Press

調査方法論

1. 山田一成. 2010. 『聞き方の技術—リサーチのための調査票作成ガイド』日本経済新聞出版社
2. Fowler, Floyd J.. 2013. *Survey Research Methods (5th Ed.)*, SAGE.
3. Groves, Robert M., Floyd J. Fowler, Mick P. Couper, James M. Lepkowski, Eleanor Singer, and Roger Tourangeau. 2009. *Survey Methodology (2nd Ed.)*, Wiley.

使用ソフト 実習が必要な場合、R を用いて解説する。

4 評価

平常点 100%

- 授業への参加および報告内容に基づいて評価する。

評点は学則に準ずる

種別	点数	成績評価	詳細
合格	90～	A+	授業目標をほぼ完全に達成している
	80～89	A	授業目標を相応に達成している
	70～79	B	A に相応するが、一部不十分な点がある
	60～69	C	授業目標を最低限に達成している
不合格	45～59	F	授業目標を達成していない
	～45	G	授業目標を達成していない

Note: 授業目標は「1. 授業の目的」を参照

5 質問・フィードバックについて

オフィス・アワーは以下の通りである。オフィス・アワーの時間帯にはアポイントメントは不要である。

- 火曜日 15:00-18:00・早稲田キャンパス 9 号館 709 研究室
- 金曜日 15:00-18:00・早稲田キャンパス 9 号館 709 研究室

以上の時間帯以外に研究室に訪問したい場合、メールや口頭でアポイントメントを取ること。

6 講義内容

以下の内容は授業の進捗具合、履修者の理解具合によって調整される場合もある。

因果推論とは	第 1 講
└ 潜在的結果枠組みと因果推論の根本問題	第 1 講
└ 因果推論の方法	第 2 講
└ 統計的因果推論	第 2 講
└ 自然実験	第 2 講
└ 無作為比較試験 (RCT)	第 2 講
└ フィールド実験	第 3 講
└ 実験室実験	第 3 講
└ サーベイ実験	第 3 講
└ 方法	
└ フレーミング実験	第 4-5 講
└ コンジョイント実験とその応用	第 6-7 講
└ リスト実験	第 8-9 講
└ 様々な考慮事項	
└ 研究倫理	第 10 講
└ IRB とデセプション	第 10 講
└ 事前登録	第 10 講
└ 検定力とサンプルサイズ	第 10 講
└ 回答者の不注意と satisficer	
└ マニピュレーション・チェックと IMC	第 11 講
└ サンプリングと代表性	
└ 重み付け	第 11 講
└ 内的妥当性と外的妥当性	第 11 講
└ バランスチェック	第 12 講
└ 処置効果の不均一性	第 12 講
└ 実験計画の発表	第 13-15 講

7 参考資料

7.1 Balance Check

- Imai, Kosuke, Gary King, Elizabeth A. Stuart, 2008, “Misunderstandings between experimentalists and observationalists about causal inference,” *Journal of the Royal Statistical Society, Series A (Statistics in Society)*, 171:481 – 502.
- Austin, Peter C., 2009, “Balance diagnostics for comparing the distribution of baseline covariates between treatment groups in propensity-score matched samples,” *Statistics in Medicine*, 28(25): 3083–3107.

7.2 研究倫理

- 三浦麻子、2018 「心理学におけるオープンサイエンス：「統計革命」のインフラストラクチャー」『心理学評論』61 (1): 3–12.